

# 7 漢方病機学

## はじめに

人体が疾病に陥ったとき、体内でどのような変化が起こっているのかを追求する学問は、病理学である。ヨーロッパにおいては、ギリシャ医学の四体液説を始め、その後に出現した学説にもとづいたさまざまな形の病理学が生まれた長い歴史を有する。しかし、19世紀のVirchowの出現以後は、細胞病理学を基礎として発展し、それ以前の病理学はすべて過去の遺物として顧みられることはなくなった。

一方、漢方医学でいう病理学とは、気・血・津液や臓腑・経絡など、人体を構成している諸要素が、生理的な機能を失って疾病を引き起こしたときに、それがどのようなメカニズムによるものかを研究する学問である。したがって、その意味するところは西洋医学の現在の病理学とはまったく異なる。

ところで、漢方医学では「病理」とほぼ同様の意味で「病機」という語を用いることがある。これは、『素問』至真要大論篇に疾病のメカニズムを表す言葉として用いられたのが始まりで、中国では現在もよく使用されている。西洋医学の「病理」と区別する必要性から、漢方医学の場合には「病機」の語を用いた方が望ましいと思われるが、日本では必ずしも普及しているとはいえないので、本書では「病理」「病機」「病態生理」の語を適宜使用する。以下に、漢方医学的にみたさまざまな病理現象を、病機と病証という観点から概説する。

## 疾病を総括する二種の基本的病機

病理現象そのものは具体的なものであり、さまざまな病証は、上記のように身体を構成している物質の異常や機能の失調として現れるが、どのような疾病も、「邪正相争」と「陰陽失調」の二つの側面を有している。

### 1 邪正相争

邪正相争とは、正気と邪気が生体内で相争うことである。正気とは、疾病に対する身体の抵抗力を指す。『素問』刺法論篇には、「正気内に存すれば、邪干すべからず」とあり、正気が存在が、疾病を起こさせない条件となっていることを述べている。逆にいえば、正気の失調は、疾病を引き起こす要因であり、またその疾病の重要な側面でもある。

正気とは、具体的には、気・血・津液・火（陽気）・精、臓腑、経絡などおよびそれらの機能を指している。邪気とは、生体を侵襲し、これに障害を与えるものの総称で、病邪ともいう。風・寒・暑・湿・燥・火の六淫、それに瘧氣<sup>れいき</sup>は、外から体を侵襲する病邪（外来の邪気）である。邪の側面からみれば内生五邪も邪気に含まれる。瘀血や痰飲などの病理産物や食積も邪気に属する。

邪気が生体を侵襲すれば、正気は必ずこれに対抗し、身体を防御しようとして争いが起きる。これが邪正相争であり、それに伴ってさまざまな病理現象が出現する。

## 2 陰陽失調

臓腑・経絡・気血・営衛などの相互関係が失調したり、表裏の出入・上下の昇降機能のコントロールが失われた状態を陰陽失調と総称する。たとえば、脾が昇を胃が降を主るという協調関係が壊れたり、陰液が失われ

たために陽気が亢進したりするなどはその例である。

各種の病因は、陰陽失調が存在するときのみ人体に疾病を引き起こしうる。陰陽失調とは生体の各種構成要素の動的平衡状態が崩れたものである。一般に外感病の場合の病機は邪正相争が主体となっており、内傷雑病の場合は陰陽失調が中心となることが多い。しかしどのような疾患も上記二者のいずれかの面を多か

COLUMN

コラム

## 八綱からみた病機

八綱とは、陰陽・表裏・寒熱・虚実をいう。これらは抽象的な概念であるが、これらの概念を用いることにより、病位の深淺・病邪の性質と盛衰・正気の強弱などを概括することができる。

### ①陰陽

陰陽は八綱の総綱で、一切の臨床症候は陰と陽に大別できる。表裏・寒熱・虚実もまた陰陽の中に総括される。一般に陽証は実熱証を、陰証は虚寒証および実寒証を指すことが多い。また、陰陽は前述したように代名詞として用いられることがあり、たとえば陰は陰液の、陽は陽気のそれぞれ代名詞である。（これにもとづいた概念である陰虚・陽虚などの病証については本文 p.85を参照。）

### ②表裏

表裏は人体の部位の区分である。皮毛・腠理・浅表の経絡などの部位が表で、その内側はすべて裏である。外邪はまず表を侵襲し、このときに起こる邪正相争の際に生じる悪寒（悪風）・発熱・頭痛・関節痛・脈浮などの症状を表証という。これには寒・熱・虚・実の別がある。裏証とは病位が裏にあることをいい、外感病の場合には表にあった邪が時間を経て裏に入った場合に用いる。これも寒・熱・虚・実の別がある。裏のうち、表に近い部分を半表半裏という。ここに邪が侵入すると、往来寒熱・胸脇苦満などの症状が出現する。これを半表半裏証という。

### ③寒熱

寒熱は病変の性状を指す。寒証には、寒邪の侵襲を受けて発症するもの（実寒）と、陽気の虚衰によるもの（虚寒）がある。一方熱証には、寒邪が化熱したものや熱邪の侵襲を受けて発症するもの（実熱）、および津液の不足によって生じるもの（虚熱）がある。また、寒証と熱証が同時にみられるものを寒熱錯雑といい、上熱下寒はその一種である。このほか、寒証であるのに熱証に似た症候を呈したり（真寒假熱）、熱証であるのに寒証に似た症候を呈する（真熱假寒）こともある。

### ④虚実

虚実は正気と病邪の状況を表す用語であり、「邪気盛んなれば実、精気奪すれば虚」が基本的な定義である。虚証は正気の虚を意味する。すなわち、体内の基本精微物質である気・血・津液・火・精などの不足であり、その症状は全身的にも現れるが、臓腑におけるそれらの虚としても出現する。なお臨床的には、陰液の不足を陰虚、火（陽気）の不足を陽虚という名称で用いることが多い。陽虚は寒証を伴い、陰虚は熱証を伴う。実証は、外邪の侵襲・痰飲・瘀血・食積など、病邪の存在によって発生する。実際には、邪の存在により邪正相争が起こるが、その状態はさまざまである。これらについては、それぞれの項目で述べる。